

2019 年度実践的研究新規助成対象研究概要

実践的課題研究

1. スマート杖の開発と高齢者の地域活動参加モデルの構築

藤田浩二（東京医科歯科大学大学院講師）

高齢者は、運動能力の低下とともに活動範囲が縮小し、社会参加の機会が徐々に減少してしまふ。ADL（日常生活動作）低下の主原因となる「転倒」を予防するためには、筋力・バランス能力、心肺機能の維持が必要で、歩行の有効性が示されている。特に、杖使用者は歩行量が減少する傾向が強いが、さらなる筋力低下や転倒を予防するために、杖使用者であっても適切な歩行負荷が必要である。一方で、高齢者が自身の適切な運動量を把握するのは難しい。

本研究では、一般的な T 字杖に各種センサを内蔵して IoT 化したスマート杖を開発する。杖を通して利用者の健康状態と運動量を把握、利用者に提示するとともに、歩行やつまずきデータを地域共有することで、“お散歩コース”や“ハザードマップ”等の地域情報も提示し、積極的な社会参加を促す。杖の開発だけではなく、杖の使用を介した身体情報把握、自発的な運動の誘発を目的とし、さらに地域参加を促すことを見据えた実践的研究を行う。高齢者ができるだけ自立して生活できる新たな社会システムの構築を志向する

若手実践的課題研究

1. 認知症ケアユニット（認知症ケア専用病床）の効果についての研究

多胡雅毅（佐賀大学医学部講師）

我が国の一般病棟入院患者は高齢化し、2 割が認知症を有している。94%の病院が認知症患者の診療に困難さを感じ、特に急性期診療での看護面の時間的、物理的、精神的負担は甚大である。

祐愛会織田病院は、病床 111 床、11 診療科（精神科は含まず）を有し、年間の入院 3200 名以上、病床利用率 99%、在院日数 12 日の急性期病院である。同院では認知症ケアに関する取り組みとして、ユマニチュードの知識を持った多職種（心理士、看護師、MSW、PT 等）が常在し、専用スペースと 8 床（2 室）をユニット化した Dementia Care Unit（認知症ケア専用病床・認知症ケア加算 1 算定）を 24 時間対応で運用している。それにより、看護業務負担と体幹抑制試行数は減少したが、患者への影響は検証できていない。本研究では、DCU 介入が、患者の日常生活動作や認知症の客観的指標、再入院率、退院時転帰等にどのような影響を及ぼしたかを明らかにし、急性期病院における認知症ケア専用病床の有用性について提言を行いたい。